



旧大洲商業銀行



原千代吉夫婦の墓

悠久の流れを見せる母なる川「肱川」、その周辺には魅力的な近代化遺産の数々も存在する。近世から近代にかけて、効率的な水運ルートとして物資集散の幹線の役割りを果たしていたこの川は、その意味では各種産業の母胎ともなっていた。

明治34年（1901）末に竣工する大洲商業銀行（現おおよそ赤煉瓦館）は、中でも近代の大洲を象徴する建物。加藤家六万石の城下町として、そ

“MY TOWN” うおっちんで

# 歩 & 目 定

キ ラ テ ス  
ラ テ ス

Vol.69

## 大洲エリアの近代化遺産巡り

岡崎 直司

タウンツアーズム講座主宰・  
ヘリテージマネージャー

れまで色彩的には瓦の黒と土壁や千本格子などダークグレーで構成されていたであろう朝霧の町並みに、忽然と建ち現れた赤煉瓦の建物。それは、きつと明治というハイカラ気分満載で登場したに違いない。立地も肱川の直ぐそば、かつて舟運による物資搬入のメインストリートだった通りに面して建つ。因みに、この建物に使用された赤煉瓦は、地元の原煉瓦で製作。その製作者である原千代吉の墓は、全国的にも珍しい煉瓦仕立てである。

当時の大洲における銀行経営を支えた経済基盤は、何と言っても製糸業、木蠟業など。特に前者は、明治23年に河野喜兵衛と程野宗兵衛がこの地で初めての製糸工場を操業、以降30年余り、大正11年には大洲町には9工場も出現し、さながら工業都市の様相を体している。大正初期の第一次世界大戦頃には、伊予系は全国区で名声を博し、愛媛は関西一の産額を誇っていたが、大洲はまさにその中心地だった。この銀行のほど近くに、もう一つの煉瓦建築が今も残り、これも明治39年に建てられた程野製糸場の繭倉庫である。



臥龍山荘・臥龍院

一方の木蠟業はどうか。内子の町並みで有名だが、明治期には大洲町（当時）を含む喜多郡で全国の4割を生産していた。そして新谷出身の河内寅次郎が神戸で喜多組という名の木蠟会社を経営し、その財で建設したのが臥龍山荘である。構想10年と言われ、不老庵（明治34年）、臥龍院（同38年）などの数寄屋の名建築を配した庭園が同40年に完成する。建物は地元の名棟梁中野寅雄、京都の千家十職が職人技の妙技を至る所で見せている。庭は神戸の植徳。大正期に入ると、電気事業の影響もあって次第に産業として衰退するが、木蠟は確実にある時期の大洲を豊かにした産業であった。

そのシーラカンスのような木蠟業を奇跡的に現役で頑張っているのが、長浜町にあるセラリカNODAつるかめ工場（旧喜多製蠟）である。流石に中四国でここだけというレアな産業であることが今更ながら



旧喜多製蠟ポイラー釜

驚く。この会社は、現在でこそ本社が神奈川県にあるが、元々の創業の地は福岡県八女市。燻の実を原料とする木蠟業の火を守り続けている会社である。現在その燻は、八女と水俣



西村兵太郎の像

橋（昭和10年完成）である。設計者の増田淳は、若き日に渡米し、五大湖水運の起点として開

あることを自覚しておきたい。こうした近代橋梁の建設はモータリーゼーションの黎明期でもあったが、この地における交通革命としては、先に開通した愛媛



セラリカNODAの生蠟

から仕入れていたとのこと。内部を見学させて頂くと、戦前期（喜多製燻時代）に設備された煉瓦製ボイラー釜が迫力を見せる。現役では国内最古ではないかとも見られている。そこから外部につながるコンクリート煙突も、戦時中を受けたグラマンの銃撃痕を従業員のみんなで修復したシロモノであるとか。トラス構造が見られる倉庫も、元は八幡浜製氷の長浜工場だった建物。何れにしても、蒸し上げた燻の実を搾ると、液が採取され、それを蠟型で固めたのが生蠟（青蠟）。これを一カ月半天日干しにし、やっと製品段階となる。是非多くの方知って欲しい伝統産業の一つ。

ここ長浜には、もう一つ貴重な近代化遺産がある。戦前期の現役バスキュール式可動橋、長浜大



長浜大橋



長浜大橋 銃撃痕

閉橋のメッカであるシカゴで土木工学を学んだ気鋭のエンジニア。そうした人材に白羽の矢を立て、肱川舟運の条件に合うプロジェクトを推進した立役者が当時の長浜町長西村兵太郎。長浜高校の角地には堂々の肖像が立てられ、他にも県下初の水道事業や水族館建設など、辣腕をふるった面影が偲ばれる。また、この橋の知られざる希少価値として、戦時中のグラマンによる銃撃痕が欄干のアチコチに見受けられることにも注目してほしい。ここ肱川河口部の長浜は、太平洋上のアメリカ艦隊から豊後水道を北上する艦載機の攻撃空路に当たり、広島・呉、松山空襲の帰り際に被災することが多かったのだ。戦後70年を目前として体験者が激減する中、遺し伝えられるべき遺産価値にはこうした側面も



愛媛鉄道・大越トンネル

の国鉄仕様に改軌され松山からの予讃本線に直結となる。筏流しなど、肱川舟運の牧歌的な風景から、大正期には黒煙を上げて力強

く走る機関車が時代を牽引し、その視覚的な主役交代の様は強く民衆の心を捉えたに違いない。しかしながら、大越・河内・八多喜の三基の煉瓦製石積みトンネルが残されているものの、今や現地へ行くと当時の喧騒が嘘のような佇まいでそれは現れる。その感傷の直ぐまた近くを肱川がゆったりと流れ、実に不思議な気持ちにさせられる。